

I 神奈川大学人文学会設立五〇周年と 『人文研究』第一五〇号発行に立ち会って

'03—'04年度人文学会々長 三 星 宗 雄

「神奈川大学人文学会（以下「人文学会」と略す）」の設立は一九五三年（昭和二八年）であるから、今年が丁度その五〇周年にあたる。横浜専門学校から新制神奈川大学へ移行したわずか三年後、外国語学部設立（一九六五年）の実に十二年前のことであった。

人文学会設立の主旨は第一に「精神科学」の必要性、第二に機関誌『人文研究』の発行（一九五四年第一集発行）、そして第三に「学生研究部会」（現「学生部会」）の設置（一九五七年）であった（草薙正夫、一九八八）。この思想は五〇年後の現在でも脈々と受け継がれていて感動的でさえある。当時法経学部と工学部しかなかった時期に精神科学あるいは人文科学の必要性を説かれ同時にそれをさまざま形で実現させた草薙正夫初代委員長（現職名…会長）を初めとする偉大な諸先生方の先見性と実行力にはただただ恐れおののくばかりである。こうした思想が外国語学部設立のみならず現在の「学部横断的な」ゼミの神大」の学風となつて結実したことは周知の通りである。

『人文研究』の年三回発行の原則は現在も揺らいでいない。今年はその第二五〇号の記念の年である。『人文研究』は本学における長い大学紛争の最中にあつても一度たりとも休刊にしなかつたという（工藤喜作、一九八八）。堂々たる情報発信の歴史を誇っているのである。

二〇〇三年現在、情報化・デジタル化（ＩＴ化）の波が社会を覆いつつある。神奈川大学も、また人文学会も例外ではない。私共の二〇〇一―二〇〇二年度常任委員会は人文学会／人文学研究所のＩＴ化を立案した。具体的にはネットワークの構築、ホームページの掲載、各種データベースの構築、『人文研究』のネット上での公開および各種ハードウェア／ソフトウェアの整備等である。いわば学内における一大情報集積基地構想である。諸般の事情で一年遅れたが、この二〇〇三年三月にネットワークの構築が完成し、待望のホームページを掲載するまでにこぎ着けた。応援して下さった会員の方々に心から御礼申し上げます。人文学会は今後ますますＩＴ化の道を歩むことになるう。

輝かしい歴史を持つ現在の人文学会もいくつかの課題を抱えている。その一つは学生部会の執行部委員の補充に毎年苦勞してることである。今年度は少し多いが、ここ数年間わずか四人の体制が続いた。学生部会の活動自体は決して落ちているとは思わないが、やはり「にぎわっている」とは言えない。今年度もそうだが、多くが同じ学年（しかも四年生）の委員であることが気にかかる。何か縦につながる連続性あるいは歴史性と言ったものの希薄さを感じてしまう。学内の他の学会である法学会や経済学会ではずいぶん前に学生部会は廃止された。我々人文学会の学生部会は学内に残された「最後の砦」である。そういう意味でもぜひ学生部会に往年のにぎやかさを取り戻してもらいたいと自戒を込めて思う。機関誌『世代』の誌名が示唆するように。

今こうして古色蒼然とした初期の『人文研究』を手にとってみると、深い考えも持たずにこのような職を引き受けたことが恥ずかしいし、同時に先輩諸先生方の鮮烈な活動に触れる機会を得て改めて身の引き締まる思いである。このような変革の時期に常任委員の一人として人文学会に関わることができたことは大変幸運でありかつ光栄に感じる。できるだけいい形で次の執行部にバトンタッチしたいと思う。最後に全ての会員の方々、学生部会員、そして裏方で全ての事務的な仕事を引き受けて下さっている人文学研究所の設楽英子さんと学会／研究所のスタッフの方々はこの場を借りて心から御礼申し上げます。